農家のヨメ?!通信

VOL.11

結婚5周年
オットスペシャル!

ヨメ?!
十勝で100年続く
とやま農場の長男のヨメ。
帯広市内の印刷会社に勤める。
2018年3月に第1子を出産。

50日間の恋人

オットとは、世に言う「電撃結婚」である。2014年のクリスマスから、2015年の2月12日、私の誕生日までのわずか50日間が、恋人だった期間だ。初対面からのお付き合いではもちろんなく（そこまでの冒険心はない）、出会いはそれから7年前に遡る。農大生だった彼がインターンシップで私が働いている会社に来たのがそもそもの始まりだ。

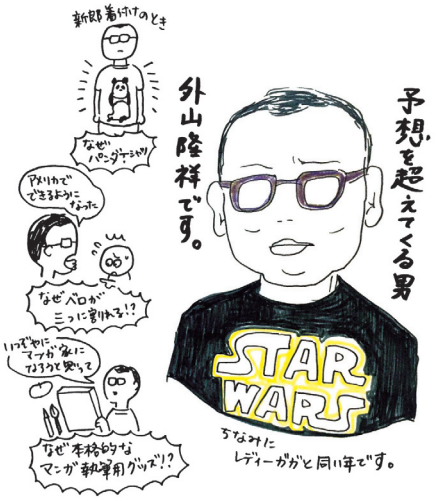
20代前半の彼が、なぜ農業とは無関係に思える印刷・出版業である我が社に来たのか。それは「今後農業も生産だけでなく情報発信をしていかなければ」という彼なりのビジョンがあってのことだった。

比較的早い段階で産直や家族通信、ホームページなどを作っていたとやま農場。オットの代になってから『食卓に笑顔の種を届けたい』というキャッチコピーやロゴマーク、商品パッケージなどで農場ブランドを少しずつ確立させてきた。当時は「若くして農場を継ぐことを決めている青年」という印象で「頑張りなよ！」などと他人事でアドバイスをしていた。その後何度か取材に訪れたり、異業種を交えての飲み会などで年に1、2回会う機会はあったが、彼は決して私好みの顔や性格とは言い切れず、付き合った当初や結婚の報告の時にはずいぶんと周りに驚かれたものである。

けれど私は、昔も今も、彼の見た目には現れない芯の部分に惹かれ、自分の人生を賭けてみようと思ったのだと思う。同時に、とやま農場と、ひいては農業という世界に可能性を感じてもいた。

恋人だった期間はとても短く、わずかな思い出しかない。ゆっくりと関係をつくっていけばいいかと思っていた矢先の、「誕生日は大安だね」というわかりずらいプロポーズ予告。年明けにはわたわたと両家への挨拶や会社への報告も済ませ、付き合ってから51日目にはオットになっていた。

それからあっという間に5年が経とうとしている。夫婦の関係がまるで一本の大木のように夫婦らしくなることから、木に例えて木婚式という節目の年らしい。まだまだそれぞれの枝をひょろひょろと伸ばし頼りない木だが、根は少しずつ大地に馴染んできたように思う。



love your family

彼と家族になる以前、結婚することは自分の新しい家族をつくることだと思っていた。自分とオット、そして生まれてくる子どもでつくる家族。それはもちろん間違いではないのだけど、私の場合、自分が想像していた以上に、家族の輪は広がった。自分が育ってきた家族、そして彼が育ってきた家族。そして新しい私たち家族。それがぜ～んぶまとまって、ひとつの大きな家族になったのだ。こう感じるようになったのは、ひとえに、畑で行った「菜の花ブライダル」という一大イベントを両家総出で手作りしたことが大きい。あの日のことは、何年たっても色あせない思い出としてみんなの心に刻まれている。

誓いの言葉に、「あなたと、あなたの家族に永遠の愛を誓います」という言葉を選んだ。それは、オットから入籍の日にもらったメッセージだ。章題の英文と、「夢や成功、お金、全部大事です。でも、大切な家族がそばにいなければ意味がありません。一緒にがんばっていこう。愛をはぐくもう。家族だよ」と、普段は口下手な彼からのまっすぐな思いが綴られていた。もちろん、言うは易し、行うは難しである。

でも、そのひと言があったから、私は今もここにいる。そして、産まれた娘は、その家族全員の血を引く存在なのだ。そんな命の営みをムスメが産まれたことで、より感じるようになった。

そして、父になる

オットの中で、今もなお大きな存在であり続ける、亡くなったおとん。それは父親としての存在だけではなく、農業者の先輩を失ったことでもあり、誰にもその隙間を埋められるものではない。

でも、命は繋がることを感じてほしくて、彼に子どもを抱かせてあげることは私の夢のひとつでもあった。叶ったのは2018年のこと。性別は2人で聞き、名前はオットが付けた。産まれてからはオムツを替えてくれたり、お風呂に入れてくれたり…。ムスメが初めて手放しで歩いたのは、1歳1ヶ月頃、出かける父親を見送ろうとしてのことだった。小さな手を懸命に伸ばし、ポシリ、ポシリと、1、2歩歩いたのだ。私は後ろから見ていたが、オットの驚きと喜びの入り混じった顔を今でも思い出す。

誰でもそうだと思うけれど、愛する人にはいつでも笑っていてほしい。そして、自分がそれを提供できる存在であったなら、それはとても幸せだ。

元来人前でふざけたり、おどけたりするタイプではない彼が、ムスメとは笑顔で遊んでいる姿を見ると、しみじみ良かったなぁと思う。そして、私たちも、同じように両親に望まれ愛され育ったことを実感できる時でもある。

子どもの成長に合わせて、一緒に笑ったり泣いたりしながら、私たちも少しずつオヤになっていくんだろう。ひとまず、保育所で覚えたての投げキッスに見送られて、ニヤニヤしながら仕事に向かうオットの姿を見る「今」が、いつか夢見た「未来」であることは間違いない。